

留学生による日本語教育活動における参加者の意識変化についての調査 A Survey of the Participants' Ideas Changes through Japanese-language Educational Activities

横田隆志, 北陸大学
Takashi Yokota, Hokuriku University

1. はじめに

近年、言語教育の主体が教師から学習者へと移っており、教師の役割は接触場面における自律学習支援に変化している。また、言語学習も社会的文化的アプローチに則って行われるようになり、言語教育も「ことばによって活動する」場をつくること（細川他 2016）にシフトしている。そのために、社会との関わりや社会への参加を目的とした日本語教育（佐藤他 2011）が重視されはじめています。

本研究では、日本語教育活動として教室外で里山保全活動を行った。従来、日本語教育研究で主に取り上げられてきたものは、学習者にどのような「言語使用」や「日本文化についての考え」の変化が見られたかであった。横田（2018）でも地域貢献活に参加した日本語学習者の意識調査をした結果、日本語学習者の方言や日本文化の多様性についての考えに変化が見られた。しかしながら、日本語学習者と共に活動をすることにより、活動に関わった地域住民にもさまざまな変化が起こっているはずである。

そこで、本研究では、日本語教育活動に参加した留学生と地域の参加者の「ことば」や「文化」についての意識の変化に焦点を当て、個人の変化の観点に注目し、インタビューを通じて意識の変化を明らかにする。また、このような日本語教育活動が社会に対してどのようなメリットがあったのかを考察する。

2. 教室外活動の研究

社会との関わりや社会への参加を目的とした日本語教育が注目されている現在、日本語のレベルに関わらず、教室外活動についての研究は増えてきている。

初級レベルでの教室外活動では、澤他（2011）、西岡（2008）などの研究がある。澤他は、日本の大学の留学生別科に在籍する留学生が来日後間もない初級の授業でプロジェクトワークを行うことにより、学習者自身が必要な日本語を知ることができ、日本語学習の動機づけにつながることを明らかにしている。また、西岡は、韓国の大学の日本語クラスで行った韓国に留学している日本人留学生との交流型を中心とした日本語学習についての報告をしている。外国語としての日本語環境でも留学生と触れ合うことにより、双方の異文化理解を促進できると述べている。このように教室外活動は上級クラスだけが行うものではなく、初級の学習者にも効果的であることが分かっている。

また、日本の大学での研修コースでの日本語教室外活動については、青柳（2005）や青柳・山本（2006）がある。青柳は、大学研修コースで教室外活動を行い、学習者が自ら授業の企画に携わり、自律的に教室外活動をした報告をしている。その結果、日本人との交流ができ、学習者にやりがいを与える一方、時間的、経済的な負担を学習者に与えるデメリットもあると述べている。青柳・山本

は、大学研修コースでの教室外活動で日本語の正確さだけではなく、滑らかさを会得することを目標とした活動の報告をしている。そこでは、日本語学習だけではなく、学習者が日本文化の体験、日本人との交流ができたことも明らかにしている。このように教室外の日本語活動は、日本語学習だけではなく、日本文化の理解や日本人との交流から様々なことが学べるのである。

そして、短期の訪日大学生を対象とした研究では、熊野・石井（2010）がある。熊野・石井は、海外の大学生の日本研修で体験交流活動を行い、自律学習支援に役立ったと報告している。また、羽太、西野（2012）は、非母語話者の教師に対する短期研修での体験交流活動についての調査を行っている。その結果、日本語運用についての自信、日本語学習の意欲、学習者への共感などに変化が見られたことを明らかにしている。このように海外からの短期の日本語学習者に対しても教室外活動は有意義なものだということが分かる。

教室外の日本語教育活動は、学習者の日本語能力の向上や日本文化に対する意識の変化に焦点が当てられており、学習者に有意義な活動であると述べられている研究が主である。しかし、教室外の活動には学習者だけではなく、必ずそこに参加している日本人がいる。残念ながら、その活動に参加している日本人の意識の変化に焦点を当てている研究は少ない。白岩（2012）は、専門学校留学生と小学生の交流活動について調査した。小学生との交流活動は留学生の日本語の勉強には役に立たなかったが、交流活動には意義があったと述べている。また、小学生にとっても国際交流という点から有意義であったと日本人の参加者の意識についての調査を行っている。ただ、その結論はアンケートの結果からだけであり、どのように有意義だったのかについては明らかにしていない。

3. 教室外活動の実践とその活動に参加した人々

本プログラムでは、ヤマダチ会というNPOと提携し、白山ろくに住む地域の人々の協力のもと、白山ろくおける森づくり及び耕作放棄地再生の実践的な作業を行った。その際にヤマダチ会の代表が大学と地域とをつなぐコーディネーターをしてくれた。この里山保全活動を通じて、白山ろくに住む人々と留学生との交流を行い、白山ろくの過疎地の活性化を促進するのが主な目的であった。実施機関は準備も含めて2017年4月から2018年2月であった。

実際の活動は6回であり、作業の内容については以下の通りである。

- ①山菜栽培、電気柵の設置
- ②杉林整備
- ③里山についての学習会
- ④山菜栽培、地域の人との交流会
- ⑤木の玉切り、きのこ植菌
- ⑥畑の冬支度、山菜の植栽
- ⑦冬の里山調査、地域の人との交流会

第1回目は、5月に実施、北陸大学からは14名の留学生が参加した。地域の人々と一緒に耕作放棄地で山菜の行者ニンニクの種をとって植えた。また、マイタケの菌が入った株を植えたり、畑を耕したりした。

第2回は杉林の整備を6月に実施した。北陸大学からは8名の留学生が参加した。地域の人々と一緒に今秋から里山を舞台に森作りを始めるための準備を行った。

第3回目は、9月に山のコテージで留学生10名で学習会を行った。理論的なことを学ぶために森や里山について考え、教科書では学ぶことのない「里山」と昔の日本の生活とのかかわりを知る活動を行った。また、環境保護や現在山で起きているさまざまな問題が「里山」と関係があることを学んだ。留学生の多くは中国からの留学生だったので中国の自然についてや環境問題などを日本の自然や環境問題との比較を通じて考えることができた。

第4回は9月に実施、北陸大学からは10名の留学生が参加した。地域の人々と一緒に耕作放棄地での山菜栽培の手伝いをした。山菜を植える場所の草刈、わらびの畑の草刈をした。また、作業終了後は、収穫した野菜とイノシシの肉を自分で調理し、地域の人々と交流会を行った。

第5回目は、11月に実施し、北陸大学からは8名の参加があった。里山でコナラの玉切り、シイタケの植菌を行った。チェーンソーは前回講習を行い、練習したので、上手に玉切りができた。また、ドリルでコナラに穴を開けて、シイタケの菌駒を木づちで打ち込んだ。

第6回目は、11月に耕作放棄地で8名の留学生が作業を行った。畑の冬支度、山ヨモギ、ごごみの植栽を中心に行った。2つのグループに別れ、畑に堆肥をまくグループとクレソン畑の屋根の取り外しを行った。その後、防草シートの取り外し等、冬に向けた畑の作業を行い、山ヨモギ、ごごみの植栽を行った。

第7回は、2月に留学生11名で山のコテージで行った。雪の白山ろくを実際に体験したり、雪の多い地方の人々の暮らしについての話を聞いたりしながら雪国での生活について調査を実施した。また里山に住む動物や里山で見られる植物などを通じて里山の冬を感じる。さらに白山ろくに住む若い人たちと一年間の作業や研修で学んだことについて語った。

北陸大学からは毎回10名程度、地域の人々の参加は作業によって多いときや少ないときがあった。また、毎回参加した地域の方は少なく、コーディネーターの一名と地域の人々のリーダー的な存在の2名だった。

4. 本研究の目的と方法

4.1 本研究の目的

本研究では、日本語活動として教室外活動に参加した留学生、留学生と関わったコーディネーターや地域の人々の意識の変化を明らかにすることを目的とする。具体的には、教室外活動に参加した留学生、コーディネーター、地域の人々に活動を通じて考えたこと、またそれに関する具体的な出来事の語りを中心に置き、インタビューを行い、そのデータから分析する。

4.2 調査概要

①調査期間：2018年3月～4月

②調査対象者：北陸大学編入留学生2名（中国）、コーディネーター1名、地域住民2名（全ての活動に参加した日本人）を対象として調査を行う。調査では、学習者の語りに重点を置くために1対1の半構造化インタビューを行う。インタビューでは、一年間の活動を振り返ってもらい、活動を通じて考えたこと、またそれに関する具体的な出来事について語ってもらった。インタビューの時間は各1時間程度で、日本語で行った。その後、SCAT（大谷 2008）を使用し、文字化したデータからストーリーラインを作成、言語、文化等に関わるものを抽出し、考察し、意識の変化のプロセスを明らかにした。

5. 調査結果

留学生1

文化

- ・日本の印象は大都市だったが、田舎も存在することを発見した。教科書ではあまりこのようなことは取上げていない。
- ・町から一時間もかからないところに山があり、山に行くと野生動物が身近な存在だったのに驚いた。日本は自然豊かなところだと感じた。
- ・日本は田舎と都市の境界があまりない。
- ・山に住む人は都会にいけない人ではなくライフスタイルとして住んでいる人もいることが分かった。
- ・日本の過疎地の存在を知り、日本の新しい問題を知ることができた。
- ・山で生活している人は日本人のステレオタイプ、まじめ、残業が多い、生活のプレッシャーがあるなどとはかなりかけ離れている。
- ・人生で初めて野生動物の肉を食べた。最初はこわかったが、食べてみると美味しく、感動した。

言語

- ・金沢の方言とはまた少し違う方言で、理解するのが難しかった。そのために上手にコミュニケーションができないこともあった。
- ・ゆっくりと話をしたり、聞き返したりすることでコミュニケーションができた。相手と交流する気持ちがあれば伝わることを学んだ。
- ・方言は恥ずかしいと思っていたが、それぞれの人が生活していく場所での言語で恥ずかしさはないことに気づいた。
- ・日本の方言は種類が少ないと思っていたが、間違いだった。

留学生 2

文化

- ・日本はテレビで見た都会のイメージが強かった。しかし、都会とは違う場所が日本にも存在することに気がついた。
- ・山での生活は涼しくて、夏はとても快適だった。しかし、冬は雪が多くて大変そうだった。便利な都会にすまないのは不思議である。
- ・高齢の人が山で元気に作業しているのを見て驚いた。中国では、老人は働かないというイメージがある。しかし、老人が非常に元気だった。
- ・山については全く知らなかったが、自然豊かな環境で野生の動物を見ることができた。日本の田舎（白山ろく）は夏は不便ではなく、住みやすそう。
- ・山の不便さも感じることもできた（除雪、車の運転、買い物など）、また、若者にとっては魅力がないかなと思った。
- ・不便さはマイナスではなく生活の質を考えると非常に素晴らしいものである。

言語

- ・最初は方言や自分の日本語が原因で上手にコミュニケーションできなかった。しかし、だんだん慣れてきた。慣れるというのはコミュニケーションでは大切なものであると気づいた。
- ・学校で習った文法や日本人らしさとは違うものもあった。
- ・正しい日本語についてもう一度考えることができた。
- ・自分の日本語をゆっくりと聞いてくれて嬉しかった。普段は分からないとそれで終わってしまう。
- ・自分の日本語も方言と同じ一種のバリエーションであると考えたと日本語に自信が出てきた。

コーディネーター (30代男性)

文化

- ・火鍋を食べたときに想像できないくらい辛かった。また、細い女子学生がたくさん食べるのに驚いた。どうして太らないのか不思議だった。
- ・山での作業なのにいつもきれいな服で来るのが理解できなかった。長靴も履いたことがないことに驚いた。
- ・山に興味があるのは山について全く知らないからかなと思った。山で生活していて、都会に行った人は興味がないのだろう。
- ・積極的に活動をしてくれた。日本人の大学生のコーディネートもしているが日本人学生よりも積極的に活動することに気がついた。
- ・外国人でも山に興味を持ってくれる人がいるので今後はこのようなプログラムを増やして行きたいと考えている。

言語

- ・以前所属していた大学院の研究室に中国人留学生がいたが、彼らよりも日本語が上手だった。
- ・自分の日本語でも伝わらないときには何か原因があるか考えるようになった。
- ・コミュニケーションは実は日本人同士でも上手くいっていない時があるが、なんとなく伝わっていると思い、気にしない場合が多いことに気づいた。

地域の人①（70代男性）

文化

- ・中国人のイメージはあまりよくなかった。しかし、話をしていくうちに日本の普通の大学生と同じような感じがした。
- ・中国の食べ物や生活についてのことを聞くうちに行ってみたいと思うようになった。
- ・日本の大学生よりも積極的に活動をしていた。労働力としては期待していなかったのが意外だった。
- ・日本の若い人たちは山での生活に興味を持たない。山についてたくさん質問をする積極性に驚いた。
- ・年齢、言葉、性別が違うので話をすると疲れる。しかし、刺激を受けて元気になった。
- ・自分の家を見て「大きい」と驚いていた留学生が印象的だった。中国の住宅についての話は興味深かった。

言語

- ・日本語が非常に上手だった。中国で2年間学習しただけで習得できるのは驚いた。
- ・自分の日本語を理解してもらえないことがあった。先生に説明してもらおうと理解していたのが不思議だった。日本人同士でのコミュニケーションと違う方法でのコミュニケーションがあることに気づいた。
- ・なるべく共通語を使おうと思ったができなかった。

地域の人②（60代男性）

文化

- ・以前、農業研修で韓国人が来たが、また雰囲気が違う感じだった。しかし、日本人よりも積極的にチャレンジすることが多い気がした。
- ・山に興味を持ってくれる若い人がいると嬉しい。外国人でもこんなに山に興味を持っている人がいることが分かった。
- ・山に住んでいると海外旅行には程遠いが、外国人に来てもらって国際交流することもできるのを発見した。日本の山についてこれからも知ってもらいたいと考えるようになった。
- ・毎日食べている野菜について全く知らないことに驚いた。
- ・自分の知っている中国と留学生から聞く中国にはギャップがあった。中国がと

ても速いスピードで進化していることを知ることができた。

言語

- ・外国人と話す機会がなかったので最初は大丈夫かなと思った。想像していたより日本語ができたので驚いた。
- ・中国語の音がとても面白かった。いろいろな単語を教えてもらった。
- ・自分の日本語（石川弁）を理解してもらえなかった。また、留学生のほうが共通語が上手だった。

6. 考察

今回の調査から教室外活動に参加した学習者、学習者と関わったコーディネーターや地域住民の意識の変化をまとめてみる。

まず、留学生は、日本や日本人の多様性、日本語の多様性、コミュニケーションについての発見があった。文化の面では、自分たちが中国や日本の大学で習った、またマスメディアを通じて理解していた日本とは違う日本があり、それを発見することにより、新しい日本を知ることができた。そして、それにより日本の多様性を学ぶことができた。また、言語に関しても方言話者との会話で日本語の多様性を感じた一方、言語コミュニケーションについても考えるきっかけとなったようである。自分自身が無意識のうちに感じていた方言使用の劣等感や日本語学習者としての日本語についてもバリエーションというキーワードで日本語を自信をもって使用するようになったようである。

学習者と関わったコーディネーターは、異文化体験、プログラムの可能性、コミュニケーションについての発見などに気づき、それらの意識の変化が見られた。異文化については、毎回きれいな格好で山に来たり、長靴を履いたことがなかったりする留学生との交流で異文化体験ができた。普段は日本人の大学生と接することはあるが留学生とはあまりなく、毎回説明をするのにも大変だったようである。しかし、留学生と定期的に付き合うことにより、自分自身にとって当たり前なのは他人には当たり前ではないことに気がついたようである。また、山のプログラムは日本人の大学生を対象にしていたが、日本の山について全く知らない外国人に対しても可能であることに気づいた。それにより新しい外国人向けのプログラムを作り、地域貢献に生かすことができると考えた。そして、かなり日本語のレベルが高い留学生でも自分の言葉が通じないときがあり、それを自分のコミュニケーションの問題かもしれないと考えることができた。「日本語が分からない＝相手の問題」と考えていたが、そうではない場合もあることに気づいた。それによって、実は伝わっていると思っているコミュニケーションも、もしかしたら伝わっていないかもと考えて日本人ともコミュニケーションすることを意識するようになった。

地域の人たちは、中国に対するイメージの変化、国際交流について、コミュニケーションについての発見、外国人が話す日本語、自分自身の日本語などについて新しい考えを持つことができるようになった。マスメディアを通じて知っていた中国人と実際に会った中国人とは違うことを体験することができた。また、そ

の交流を通じて中国に対するイメージがプラスになっていたことが分かる。留学生との交流で中国語を学ぶこともあり、言語にも興味を持つことができた。更には留学生が話す日本語から自分自身が話す日本語についても考えるようになった。そして活動を通じて今まで考えていた国際交流は外国に行くことだったのが地域に住んでいてもできることを発見した。

留学生は先行研究と同様に教室外の日本語活動をすることにより日本語そのものの習得だけではなく、日本語や日本文化についての考えに変化があった。また、コミュニケーションについても考えるきっかけになっていた。そして、地域の人たちも異文化についての体験から他文化や他言語についての興味が出てきた。また、自分自身の日本語について、コミュニケーションの方法についても考える機会を得ていた。これは「やさしい日本語」についての発見であると思われる。地域の参加者は留学生との活動やコミュニケーションから日本語の新しい側面を感じることができたようである。

7. まとめ

今回の調査では、教室外活動に参加した学習者、学習者と関わったコーディネーターや地域住民の意識の変化を明らかにした。

留学生は、方言に触れることや山での体験から日本語・日本人・日本文化の多様性についての考えに変化が見られた。コーディネーターや地域の参加者は、異文化体験や交流によって外国人が使用する日本語、留学生の国についてのイメージについての変化が見られた。また、プログラムの可能性の発見や自分自身の日本語を見直すきっかけとなっていた。そして、活動を通じて、それぞれのコミュニケーションについて新たな発見をしていたことが分かった。このように教室外活動は日本語学習者だけが利益を受ける活動ではなく、その活動に関わった人々にも影響を与えていることが明らかになった。

今回の活動では多くの地域の人に関わってもらった。しかしながら、全ての活動に参加してくれたのは3人だったためにインタビューの対象も3人だけだった。活動の最中に参加してどうだったかという話をしたときにはいろいろな話があったので今後は一回だけでも参加した地域の人々にもインタビュー調査を行いたいと考えている。

参考文献

- 青柳にし紀 (2005) 「『教室外活動』授業報告 —信州大学留学生センター研修コース第8期において—」 信大日本語教育研究 5
- 青柳にし紀・山本もと子 (2006) 「研修コース第12期『教室外活動』授業報告 —日本語学習者の主体的な学習活動を目指して—『信州大学留学生センター紀要』第7号
- 大谷尚 (2008) 「4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案：着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き」 『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』 54 (2)

- 熊野七絵・石井容子（2010）「体験交流活動を中心とした研修における自律学習支援を学習者はどう捉えたか」広島大学留学生教育(14)、広島大学留学生センター
- 佐藤慎司・熊谷由理（編）（2011）『社会参加を目指す日本語教育』ひつじ書房
- 澤恩喜・後藤典子・渡辺文生・山上龍子（2011）「初級日本語学習者の自主的教室外活動を目指したポートフォリオの導入:一学習者の目標設定と自己評価の観点から一」『日本語教育方法研究会誌』18
- 白石麻奈（2012）「交流活動の意義を考える:留学生と小学生との交流活動の報告」『文化外国語専門学校紀要』25
- 西岡麻衣子（2008）「韓国における初級段階での交流型日本語学習(日中韓3か国合同ジョイントゼミ(北京))」『大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」活動報告書』
- 羽太園・西野藍（2012）「非母語話者日本語教師を対象とした超短期研修の成果～体験交流活動を通じた意識の変化～」『国際交流基金日本語教育紀要』(8)
- 細川英雄・尾辻恵美・マルチェッラ マリオッティ（編）（2016）『市民性形成とことばの教育』くろしお出版
- 横田隆志（2018）「教室外活動における参加者の意識変化についての調査」
ICJLE2018 口頭発表